

国語教育（読解指導）

佐藤 明宏

近年の読解指導の動向として、①主体的な言語活動の充実、②メディアリテラシーの読解指導、③特別支援を必要とする子どもの読解指導、の3点をあげる。

①主体的な言語活動の充実

文部科学省より平成23年10月に『言語活動の充実に関する指導事例集』【小学校版】が、平成24年6月に『言語活動の充実に関する指導事例集』【中学校版】が刊行された。事例集には、例えば「読んだ本について好きなところを紹介する事例（小学校1年）」があげられている。好きなところというのは子ども一人一人によって違う。この単元はそういう「自分はどうか読むか」という主体性重視の考えに基づいているのである。

教科調査官水戸部修治は、単元を通して、そういう子どもの目的意識に貫かれた言語活動を設定する意義と方法について論述している（水戸部修治「単元を貫く言語活動を位置付けた国語科の授業づくり」『実践国語教育研究』2012年4/5月号より隔月で連載）。

②メディアリテラシーの読解指導

全国大学国語教育学会は、課題研究「『メディア』から国語教育の研究と実践を展望する」を、平成22年10月の第119回鳴門大会、平成23年5月の京都大会、平成23年10月の高知大会と3回に渡って行った。その論文集が平成24年9月刊行の『国語科教育』（第七十二集）に収録され、その中で栗野志保は、『火垂るの墓』のアニメ版とテレビドラマ版との視聴比

較により、語りの視点の違いに着目させたもの、表現学習の中で、写真と言葉の相関により、同じ写真、言葉が全く異なって読めることに留意させたもの、異なる複数の『赤ずきん』絵本の比較を通して絵とセリフの相関から人物造型を考えさせたもの、などの実践事例を報告している（栗野志保「表現メディアに着目した小学校国語科における読解表現学習の試み」『国語科教育』（第七十二集））。

メディアの多様化・高度化という子どもの言語生活の変化に応じて、写真や動画などの映像テキストを取り入れた授業実践の開発が進められているのである。

③特別支援を必要とする子どもの読解指導

昨今は普通学級の中に6パーセントはLDやADHDなどの特別支援を必要とする子どもがいるという状況になってきた。そこで、桂聖はそういう子どもに焦点をあてた国語科のユニバーサルデザインについて提言している（桂聖『国語授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社、2011年）。

論者（佐藤明宏）も2012年10月に編著『特別支援の子どもの言語力をどう育成するか』（明治図書）を刊行し、スクリーニングテストを使った読解指導の実践事例を紹介している。

以上のように、読解指導は「教師が斉指導の中で、文字テキストの読解スキルを画一的に与えていく」というスタイルから、今回あげた①②③のような、もっと子ども一人一人の主体的な読解力を今の子どもの言語生活に即した形で伸ばしていく方向に向かっているのである。

（香川大学）